

第29回島根乳腺疾患研究会

日 時：2022年3月19日（土）13：45～16：30

場 所：松江テルサ 4階 中会議室
〒693-0003 松江市朝日町478-18

代 表：島根大学医学部消化器・総合外科 板倉 正幸 先生
世話人

共 催：島根乳腺疾患研究会 アストラゼネカ株式会社

1. Germline *BRCA1* large deletion を有する乳癌症例

松江市立病院乳腺・内分泌・胸部外科
内田 尚孝, 須田多香子, 松井 泰樹
同 ゲノム診療部
竹下 美保

本邦における遺伝性乳癌卵巣癌患者の *BRCA1* founder mutation は, c.188T>A, L63X で, 約30%を占める。症例は, 42歳女性の異時性両側乳癌患者。家族歴では, 母と従姉妹が乳癌の罹患歴を, 母が卵巣癌の罹患歴を有していた。左乳癌局所再発, 右乳癌発症を機に *BRCA* 遺伝子検査を望まれた。認定遺伝カウンセラーによる遺伝カウンセリングを実施後, *BRCA* 遺伝子検査を行った。その結果, *BRCA1* exon1-8 の欠損を認めた。右乳癌, 左乳癌の原発巣は, それぞれ *HER2* を発現していた。*BRCA* 遺伝子の Large rearrangement の頻度と臨床的特徴について考察する。

2. 乳癌の眼窩転移に対し放射線治療を行った症例

島根大学医学部附属病院放射線治療科
園山 陽子, 鱒岡 広志, 宇野 将史
長野奈津子, 植 敦土, 玉置 幸久
同 先端がん治療センター
兒玉 達夫
同 先端がん治療センター/腫瘍内科
田村 研治
島根県立中央病院乳腺科
渡部可那子, 橋本 幸直
同 放射線治療科
黒田 覚

症例1は50代女性。左乳癌 pT2N1M0, pStage II B の術後10年目に多発転移を来し, さらに2年後に左眼痛を認め, 生検で左眼窩転移と診断された。疼痛緩和および増大抑制目的で放射線治療 50 Gy/25 fr を実施した。照

射終了後1年2か月の時点で, 疼痛の抑制及び視力の維持が出来ており, 病状の進行あるものの全身状態も PS1 と増悪なく経過している。

症例2は40代女性。4年前より右乳房腫瘍を自覚していたとのことで, 受診時には局所の進行乳癌と全身の多発転移を認めた。頭部造影 MRI で偶発的に右眼窩尖部腫瘍を認め, 乳癌の転移と判断した。視力障害等の症状出現予防目的に放射線治療 30 Gy/10 fr を実施した。照射終了後6か月の時点で, 腫瘍は軽度縮小し, 視力も悪化なく経過している。

転移性腫瘍に対する放射線治療は QOL 維持, 疼痛緩和など様々な場面で必要とされているが, 眼窩に対する放射線治療では水晶体・網膜・視神経・視交叉といった組織の耐容線量に注意して治療を行う必要がある。今回, 線量や照射野の異なる乳癌眼窩転移の2症例を経験し, それぞれ放射線治療が有効であったと考えられた。

3. 当院での化学療法による末梢神経障害の予防対策の評価

松江赤十字病院看護部
横地 恵美, 津田佐智子, 尾村久美子
川村 悦美, 林 美幸, 山本 香織
同 乳腺外科
曳野 肇, 村田 陽子, 榎野 好成

【はじめに】

化学療法による末梢神経障害は, 長期にわたり残存するだけでなく, 重篤な場合には治療の中止に至ることもある。今回当院で行っている冷却法・圧迫法の予防における評価を行った。

【対象と方法】

院内倫理委員会での承認後, ステージ I / II / III 期の初発乳癌で術前, 術後化学療法を施行する女性患者を対象に, 上肢の圧迫法・冷却法のどちらかを施行した。圧

迫法は、医療用弾性スリーブ・手術用手袋を装着。冷却療法に冷却グローブを装着。直後に Patient Neurotoxicity Questionnaire (PNQ) 質問票で末梢神経障害の評価を行った。

【結果】

2018年8月～2021年の年6月の間、当院で乳癌治療を行った圧迫10名、冷却14名、stage I～IIIを対象として解析を行った。レジメンは圧迫法で wPTX 療法が6名、wPTX 療法±トラスツズマブ/ベルツズマブが2例、ddPTX 6例であった。冷却法で wPTX 8例 ddPTX 2例である。全例予定回数を完遂し、RDI は圧迫法で79.2%～100% (中央値 93.3%) 冷却法は58.0～100% (中央値84.0%) であった。圧迫法と冷却法ともに PNQ スコア2程度にとどまることがわかるが、回数を重ねると冷却法の PNQ スコアが高い傾向にあった。爪障害では、圧迫法では色素沈着や痛みを認めたが、再発症例では、圧迫法で爪の剥離・疼痛を認め、冷却法に変更することで症状が緩和された2症例を経験した。

【結論】

初期治療であれば圧迫も冷却も治療効果に差はなく治療を完遂できた。

4. 当院で開催した CLIMB®プログラムの実施報告

～乳がん患者家族を中心に～

島根大学医学部附属病院看護部

藤井 愛子, 園山 純子, 今岡 恵美
渡部 光子

同 小児科

黒崎あかね, 金井 理恵

同 乳腺内分泌外科

板倉 正幸

ひゃくどみクリニック

百留 美樹

安来第一病院

杉原 勉

CLIMB®プログラムはがんの親を持つ子どもたちのためのグループワークとしてアメリカの The children's Treehouse Foundation と Prof. Sue P. Heiney (サウスカロライナ大学看護学教授) が共同開発した。日本では NPO Hope Tree が2010年に日本版を作製し、現在当院を含め15病院で開催されている。当院では2019年7～8月に第1回を開催した。このプログラムは子どもの親の病気に関連するストレスに対処していくための能力を高めることを目指し、数回のセッションを同じメンバーで行い、うれしい、悲しい、混乱、怒りなどの感情とが

んについて、それに関連する工作や医療行為を通じて学ぶものである。今回当院では乳がん患者3家族、子ども4人、4回の連続したセッションで行った。参加した子どもたちは親ががんであることを知っており、各親は十分に話したと思われていたが、がんの勉強を通じて、子どもたちはもっと詳細な情報を求めていることが分かった。子どもたちの感情についても新しい親の気付きもあった。並行して親の会も開催したが、子どもという共通の話題で親同士のつながりも持つことが出来た。今回初めて当院で CLIMB®プログラムを実施したため報告する。

5. 高度貧血により心肺停止をきたした進行男性乳癌の1例

島根県立中央病院乳腺科

渡部可那子, 武田 啓志, 高村 通生
橋本 幸直

症例は64歳男性、数年前から左胸壁のしこりを自覚も未受診。意識レベル低下、左胸壁からの出血のため救急要請され、搬送中に心肺停止となった。蘇生処置にて自己心拍再開したが高度貧血を認め、輸血にて貧血は改善し、それに伴い循環動態も安定した。左胸壁腫瘤生検にて左乳癌の診断となり、化学療法を開始したが、腫瘍出血が続き、また薬剤性心筋障害が発症したため、局所コントロール目的に放射線治療を行った後、ホルモン療法に変更し、腫瘍縮小を認めた。心肺停止をきたす局所進行乳癌に対し集学的治療を行い、効果を得られた1例を経験した。

6. コロナ禍に壮年期乳がん終末期患者の早急な在宅調整行った1事例

島根大学医学部附属病院看護部

榎 咲智, 熱田 結香, 藤井奈々子
中島 良絵, 藤井 愛子, 打田絵里世
園山 純子, 今岡 恵美, 陰山美保子

同 小児科

金井 理恵

同 がん患者・家族サポートセンター

横原 貴子

同 乳腺内分泌外科

秋山 佳子, 板倉 正幸

【目的】 現在新型コロナウイルス感染拡大予防のため面会制限がある。今回、子どもをもつ壮年期乳がん終末期患者の在宅調整を早急に行った事例について報告する。

【症例】 壮年期、女性。左乳がん術後。夫、学童期の子ども2人の4人暮らし。再発転移後症状悪化のため化学

療法は中止しベストサポーターケア (BSC) へと治療方針を変更。呼吸困難のため救急要請し症状コントロール目的で入院。

【結果】コロナ禍での入院のため、患者は入院中家族に会うことが出来なかった。主治医から患者へ予後について説明。療養先について、「病院は面会ができないから家に帰りたい。」と言った。患者は家に帰って子供と一緒に過ごしたいと思う一方で、自分自身が家に帰ることで子供に恐怖心を与えてしまうのではないかと不安だった。多職種で連携し家族に患者の思いを伝えた。子供は患者が帰ってくることを望んでいたため、患者はリザー

バーマスク10L、医療用麻薬投与し入院3日目に自宅退院した。

【倫理的配慮】発表にあたり、患者の個人情報とプライバシーの保護に配慮し、家族から書面にて同意を得た。

【考察】コロナ禍で面会制限があり病院では家族と十分に面会することができなかった。終末期で病状が急速に悪化する中、医療処置が必要な患者の「家に帰りたい」という思いを尊重し、迅速に多職種連携を行い在宅療養に向けて家族間の調整を行い患者・家族の思いを叶えることができた。